

39NIGHT

三休×大谷大学

社会学部コミュニティデザイン学科 大原ゆいゼミ
野田一誠 児玉悠朔 小野智史 奥山希来 中井誠也 藤堂櫨

目次

- ・連携先の概要
- ・活動内容
- ・イベント概要
- ・工夫したこと
- ・大変だったこと
- ・良かったこと
- ・全体を通しての感想
- ・まちの居場所とは

三休（さんきゅう）について

- ・三休（さんきゅう：THANKYOU!!）は、農業を中心とした障害をお持ちの方々が働く就労継続支援B型事業所です。
- ・ハレとケを大切にし、日々の農作業だけでなく、マルシェなどのイベントも企画します。
- ・一休のまち京田辺にある「三休」は、一休宗純が大切にしていた、ありのままに生きることを行動指針の1つとし、私たちは、ここに通う1人ひとりが自分のペースで働ける場を目指しています。



サービス管理責任者 世古口 敦嗣

障害者が暮らしやすいまちにしていこうを目指すNPO法人サボネで9年間働いた後、2017年7月、社会福祉法人に転職し、採用や広報を。2018年4月よりNPO法人月と風との理事も。また2015年から約2年間、NPO法人Ubdobe関西支部長として活動。大切にしていることは「仕事をするように遊び、遊ぶように仕事をすること。」



活動内容・目的

- ・三休×大谷大学 「39NIGHT」
概要



・39NIGHTでは、barを中心に多様な世帯が交流できるような場を形成することを目的としている。

・三休で取れた食材を調理し提供する食事スペースや子供たちも楽しく遊べるキッズスペース、ゲストの人を招いて普段聞けないような話を聞くことのできるスペースを設け、大人から子供まで楽しめる空間を提供している。

目的

- ・顔見知りの関係をつくる ・地域の多世代交流 ・息抜き場の

イベントの概要



活動の中で工夫したこと

- ・年齢問わず、どの世代の方でもこれのようなスペースを提供する。
- ・子ども キッズスペース
- ・大人 お酒の提供 など
- ・第二回、第三回では、食事スペースを設置し、三休で採れた食材（ベビーリーフ、海老芋、白菜、キャベツ）を使用した料理を提供した。
- ・「39night」会場付近の住宅街への、ポスティングを行うほか、近くのコンビニやカフェなどにポスターを置くことで、より多くの方にこの活動を知ってもらえるように工夫した。
- ・カオスティックなBARを目指す要素としてゲストの方々も呼び、アロマや性相談、コースターに関する普段耳にしない話を聞ける場を作った。

活動の中で大変だったこと

- ・フライヤーやSNSを使って活動を認知してもらうことや、集客することの難しさ
- ・スケジュール通りに物事を円滑に進めるために逆算して考えて準備することの難しさ
- ・39NIGHTという企画を達成させるためにチームが一つになって進んでいくことの難しさ
 - ・食事の試作を作る際に、三休で取れた食材を活かした料理を思考し制作することの難しさ

活動の中で良かったこと



- ・39NIGHTを楽しみに来てくれた地域の方が多数いたことで、イベントのやりがいを感じた
- ・三休さんと合同で活動できたことで、一緒にその地域を盛り上げるために必要なことが学べた
- ・活動を通して、三休と大谷大学という存在を知ってもらえるきっかけにもなったこと
- ・大人も子供も関係なく、多世代の交流でつながりが増えたことによって、多角的な考えを知れた

全体を通しての感想

- ・イベントの回数を重ねることに目指していたカオスな空間にされた
- ・イベントにも多様な形があって、次にもつながるような企画を考えれた
- ・活動してイベントを成し遂げたことの達成感を感じた



私たちの考える「まちの居場所」とは

- ・街の居場所とは、心地よい雰囲気があり、安心して過ごせる場所だと考える。人々が温かく、思いやりが溢れている場所であり、誰もが自分らしく居られる環境が整っていることが大切だと考える。さまざまな人が集まり、交流が生まれる場所。
- ・また、身近なサービスが充実していると、生活がより便利で快適になる。まちの居場所は、日常生活に欠かせない重要な場所であり、その場所が心地よく、居心地が良いかどうかは、人々の生活に大きな影響を与える。